HTML2PDF.BIZ :HTMLやWebページからPDFを生成 Asial

今月のタイムス
MONTHLY SPECIAL
「ここがすごい!」大学施設
私の勉学時代
イラストギャラリー
QUIZ WORLD クイズワールド

バックナンバー
バックナンバー

お問い合わせ・ご意見・ご要望などありましたら、hp_info@kanjuku-net.co.jpまでお願いします。

関塾タイムス本誌は毎号、国立国会図書館に収蔵されています

ご注意

このサイトにある全ての内容の無断転載・転用ならびに、引用画像の二次利用を固くお断り致します。

当サイトを利用することにより生じた損害等に対する責任は負いかねますのでご了承ください。

Internet Exploler4.0またはNetscape Navigator4.0以上でご覧ください。

関塾 Kanjuku
関塾 タイムス

和歌山大学学長　山本健慈先生に聞く

個性は衝突するもの
「群（むれ）」での経験が人間を成長させる

高野・熊野世界文化遺産という豊かな自然と歴史に囲まれた和歌山大学。2004年に国立大学法人となった同大学は、地域連携の拠点となるサテライト部を設置するなど、地域との距離が近い「地方大学モデル」となるべく、幅広い活動を行っています。今月は、そんな同大学で09年に学長に就任され、自身も「地域生涯学習」などの分野で研究を重ねてこられた山本健慈先生にお話をうかがいました。

■Profile
山本健慈（やまもと　けんじ）

1948年山口県生まれ
77年3月京都大学大学院教育学研究科（博士課程）単位取得退学。同年4月より和歌山大学教育学部にて助手に着任、その後、講師、助教授、教授を歴任する。98年同大学生涯学習教育研究センター教授に就任、同センター長を2008年3月まで務める。同大学評議員、サテライト部長、副学長を経て、09年8月より学長に就任。専門は社会教育、生涯学習論。著書に「主体形成の社会教育学」（北樹出版）、「大人が育つ保育園」（ひとなる書房）など。

桑畑に囲まれた家

私が生まれたのは、山口県東部にあった玖珂町（2006年岩国市に併合）というところです。父は県の＊養蚕業の産業試験場に勤める技術者でした。養蚕技術の研究をしたり、養蚕農家の後継者である青年たちに、指導をするのが仕事です。家は桑畑の中にありました。桑の実がなる季節は、畑の中を走り回って、よく体中を紫色に染めていましたね。家は蚕室一棟を改造したもので、小さな小学校の校舎ほどの広さがありました。コンクリート打ちのままの二十畳ほどのスペースなどもあり、雨の日は友だちとここで三角ベースなどをして遊んだものです。

＊養蚕業…蚕を飼いその繭から生糸を作る産業。生糸は加工され絹製品になる。蚕を飼うために餌となる桑を栽培する。

「群」での生活で多様な価値観に触れた

家はいつもたくさんの人でにぎわっていました。試験場内には職員の住宅や研修生の寮があったため、夕食後は父の部下や青年たちが集まりました。酒を酌み交わしながら議論をするのです。戦争体験を生々しく語って聞かせてくれた人もいましたね。戦後の傷跡がまだ色濃く残っていた時代でした。父や母を訪ね、毎日様々な人がやって来ました。私は両親に厳しく躾られた記憶はありませんが、その代わり、周りにいる人たちを観察して、「ああすればいいのか」などということを学んでいました。子どもや大人、様々な「群」の中で生活している感覚です。このように幼い頃から多様な人の中で育ったので、人にはそれぞれ個性や価値観があるのだなということを、おのずと理解していました。

私には9歳と6歳年上の兄がいます。歳が離れていたので一緒に遊ぶことはあまりありませんでしたが、兄たちの受験勉強に付き合って、ラジオ講座などを聴きながら夜遅くまで勉強する姿を見ていました。受験勉強がどんなものかということも、なんとなく肌で感じていました。

信頼できる先生との出会い

1960年代になると国の養蚕事業は縮小されます。父が勤める試験場も山口市内に統合され、小学校5年生の時に引っ越さなければなりませんでした。しかし私は「仲良しの友だちと途中で別れるのはいやだ!」とわがままを言い、卒業までの1年間だけ母と二人で残りましたね。
勉強はよくできました(笑)。小学校5、6年生の担任だった芳本功先生は、そんな私に「辞書は広辞苑を買いなさい」とおっしゃいました。先生は当時24、5歳で若く勉学の意欲に溢れ、慶應義塾大学の通信制に通っておられました。大学の講義について語ってくださるのですが、私は興味を持っていろいろ質問していたようで、それで辞書を買いなさいという話になったようです。
小学校を卒業後は、山口市にある大内中学校へ進学しました。勉強の他にも、野球部やテニス部など部活動にも励みました。1963年の山口国体ではフルート奏者としてブラスバンドにも参加しましたよ。
実は、小学校時代からずっと成績の悪い生徒に厳しく接する先生に、憤りに近い理不尽さを感じていました。しかし、実際に厳しくされた友人は、そうは感じていなかったようですね。それがまた納得できなかった。「私だけがそう思っているのか」と、ずっともやもやしていました。そんな時に出会ったのが伊藤美代子先生です。音楽を担当する若くてキュートな方でした。私をブラスバンドに誘ってくださったのも伊藤先生です。はきはきとした活動的な方だったので、私も「彼女だったら話を聞いてくれる」と思ったのでしょう。ある時、ずっと抱えてきた不平等に対する憤りについて打ち明けると、「私も同じことを思っていた!」と言ってくださったのです。私だけじゃないのだと救われました。先生とは今でも交流があります。

高校は滋賀県へ個性的な仲間と過ごす

中学3年生の時、滋賀県へ引っ越すことになりました。両親の出身地であり、京都の大学へ通っていた兄とも近い場所に家を建てたのです。高校は膳所高校へ進学しました。
膳所高校は学区のトップ校だったので、優秀な生徒ばかりで苦戦しましたね。特に数学は、先生が何を言っているのかまったくわからなかった。入学して最初の試験は、ひどい結果でした。そこで夏休みに入り数学を基礎からやり直そうと決意。参考書を買い、家の前にある寺の庫裏という建物を借り切って、朝からずっと数学に打ち込みました。夏休みが終わるまでに、高校1年生の数学の範囲は自力でやり終えていましたね。膳所高校は、進学校ではありましたが、受験一色というわけではありませんでした。『源氏物語』の原文を、平安時代当時の発音で読み聞かせてくださるなど、大学の講義のような授業もありました。おもしろかったですよ。同級生も個性的でした。後に研究職の道に進んだ者も多かったですね。高校では定期考査の他に、自主参加の「実力テスト」というのがありました。1年生から3年生まで、全員が同じテストを受けるのです。当然下級生にとっては習っていない範囲も出題されます。ですが、たまに下級生が上位に入ったりする。まさに実力を試す機会でした。授業の範囲を超えて自主的に学習する生徒はけっこういましたね。私も1年生から英語は50位くらいには入っていました。実力テストのデータは学校に蓄積されていて、統計のプロのような数学の先生が分析するのですが、それで3年生になると「何位までに入ればこの大学に行ける」という目安がわかりました。
私は、中学時代に教育現場の理不尽さに疑問を抱いてから、ずっと教育問題に関心がありました。当時はジャーナリズムの方面から教育を変えていこうと考えていました。そのためにはまず教育について学ばなければいけない。そこで選んだのが京都大学の教育学部でした。結局ジャーナリストではなく、研究職を選ぶわけですが、それは「教育の現実を変えるには外側から批判するのではだめだ」と考えたからです。
教育学といえば制度としての「学校教育」に関心のある人が多いのですが、私は教育の根本的なところを知りたいと思いました。そこで成人教育、社会における教育の機能などを研究する道へ進みました。社会を変えるためには、まず人間が変わらなければならない。人間が変わるためには、新しい経験をすることが必要です。学校教育も大切ですが、大人が社会の最前線で格闘しながら何を学び、どう自分を変えていくのかも大切です。そのプロセスの意味がもっと認識されないと、社会や時代は変わっていかないと思います。

相手を理解する経験を

人間は「群」で生活をします。「群」の中には様々な個性の人間がいます。そこには必ず衝突が起きます。他者と共存していくためには、その衝突を自分たちの力で解決していくことが必要なのです。他者が悲しんでいる、あるいは苦しんでいる。それはなぜかを考えるためには、相手のことを理解しようとしなければならない。そういった経験を小さい頃から積み重ね成長していってほしい。保護者の方には、そういった経験をぜひ子どもにさせ

てほしいと思います。

コラム

「地方大学モデル」を目指して
大学と地域社会の距離が近い「地方大学モデル」を目指して、和歌山大学では様々な取り組みが行われています。教育学部の「へき地への住み込み型教育実習」がその一例です。山間・へき地にある小学校での教育実習は、クラス人数の多い都市部の学校とはまったく違う教育環境にあり、教師に求められる要素も違ってきます。柔軟な対応が求められることも多く、より実践に近い実習ができるのが特徴です。実習の期間中は、なんとその地域の家にホームステイ。過疎化が進む実習先からは「実習生が来てくれて村が活気づいた」という声もあり、学生たちも地域社会で果たす学校の役割の大切さを肌で感じるのだそうです。

ひとつ前のページへ　このページの先頭へ